元少年兵支援室

おっせさん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

身寄りのない孤児を用いた秘密警察が暴かれ、尚も全容を掴むため検察による捜査が進む中、厚労省の社会援護局に一つの部署が立ち上がった。元少年兵支援室、組織の解散によって身寄りを失った彼らの保護を行う部署だ。そして、全国に潜伏させられそのまま行方の分からぬ者たちの捜索もここの仕事だ。

目次

元少年兵支援員 ―――― 1

元少年兵支援員

「すみません、ちょっと通ります。失礼します。」

鉛色の空の下、私は集まっていた野次馬の人々合間を縫って現場へと向かった。第一報は５０分前、警察より十代後半の女性が拳銃を手に倒れているから確認に来てほしいという事だった。きっと自殺、警察も私も既にそう見当を付けていた。ティーンの自殺自体は珍しくとも考えられない事じゃない。しかし、拳銃自殺となれば話は違う、ほんの数か月前までであれば。

「お待たせしました、元少年兵支援室の山之内です。その、ご遺体は…」

「あぁ、ご苦労様です。本所署の常盤です。遺体はこちらに。」

規制線を通らせてもらい現場を取り仕切っていた刑事に声をかけると、すでにストレッチャーに乗せられた遺体の元へ案内された。そこに寝転がっていたのはここにいる誰よりも若い体であった。

「詳しいことはまた先生の方で検分してもらい、正式に書面でお伝えしますが…この顎のあたりに黒く焦げた跡が有りますんで、多分自分で押し当てて引き金を引いたんじゃないかな。あとこれが彼女の所持物です。」

弾は顎の下から入り後頭部に抜けたようで、比較的顔面は綺麗な状態であった。一転して頭はあるべき輪郭を失っており、丁度弾が抜けたと思われる場所にクレーターが出来上がっていて、恐らく吹き飛んでしまったのだろう。遺体の様子を見るのも程々に、簡単な説明をしてくれていた刑事から遺留品を受け取った。そこには彼女の存在を唯一証明するリコリスの識別票が有り。

「ありがとうございます。彼女のことはこちらで照会をかけておきますので、確認できましたら追ってご連絡いたします。これらはこちらで預からせていただきますね。」

持ち物は他に携帯とかメモ帳とか化粧道具とか…特徴のない組み合わせだ。遺書の類は見当たらないが、携帯の中に一筆したためられたものがあるかもしれない。それらを調べるのはこちらの仕事で、残った銃器を管理するのは彼らの仕事だ。そして彼女の遺体は今から法医解剖に掛けられる。どうせ自殺だとはわかりきっているが、しかし人一人が亡くなっているのだから決して手を抜いた仕事なんてできない。包み隠すなんて以ての外だ。

「全く減りませんね、彼女たちの自殺も事件も。この辺は特に多い…その誕生日が正しいのなら、この子はうちの娘と二つしか変わらない。」

刑事はストレッチャーの上の子を見ながら吐き捨てるように言った。少女の拳銃自殺…そんな物を見せられて、何も思わないなんて事はできないだろう。今、我が国には

シエラレオネやパレスチナと同様の問題が暗い影を落としている。政治的混乱と国際的孤立と共に。